

45 〈経絡血管説〉再考

松 木 き か

〈経絡〉と〈血管〉とを同一視する所謂〈経絡血管説〉は、中国伝統医学が西洋近代医学と出会って以降、繰返し提出されてきた課題である。主に〈中西医匯通派〉によって経絡と血管の異同が論じられ、徐々に同一視されるようになった経緯がある。〈経絡血管説〉の見直しをする意義は以下のようなものである。すなわち、直接的には中国伝統医学が説明原理としてきた経脈の成立過程を説明すること、間接的には中国伝統医学が考えてきたことと考慮してこなかったことを明確にすることである。

ここで一応の定義をする。〈経脈〉は経絡系統の主要な幹線で身体の深部を走行するものをいい、〈経絡〉といった場合は身体の表層に存在する支脈である絡脈を含む所謂経絡系統を指す。さらに〈血脈〉は血を運ぶ〈脈〉を

意味する。『黄帝内経』他の中国伝統医学の文字資料の解釈によって考える。さらに〈血管〉は、血液などの液体を運ぶ管を意味し、西洋医学的な意味合いとして用いる。

紀元前三世紀後半〜紀元前二世紀と考えられる馬王堆及び張家山漢墓から出土した医帛の段階で、いわば一般名詞としての身体各所の名称である身形と、腫れや痛み、傷などの病の名称である〈病形〉は成立していた。さらに、〈脈書〉と総称される医帛の中では、〈脈〉によって病形の分布がいわば空間的に分類、説明されている。三陰三陽が意識されており、陰脈と陽脈ではその働きが異なっている。そのままでは〈脈〉の実態は分からないものの、その走行ルートは多く血管と重複するように見える。例えば前脛骨動脈・静脈の走行は足陽明脈に、橈骨皮静脈は手陽明脈に対応するがごとくである。また、この時代の瀉血療法が存在も〈脈〉が血管を少なくとも考慮していたという傍証に加えられるよう。

出土資料から『黄帝内経』の間に、〈脈〉から〈経脈〉への転換が起こる。転換のために以下の条件が出揃うことが必要であった。①周身ルートの確保②属絡(臓腑との

関連)③その中を流れるもの(気)の存在④微針の登場とそれに伴う治療技術の変化、である。これらは(気)という現象の説明を可能にする媒体の導入によって起こった。

①周身ルートの確保・胃から出た穀気が肺を通って全身をめぐるルートは『靈枢』衛氣行篇に見られる衛氣の運行と、同じく『靈枢』五十宮篇に見られる運行のルートを総合するかたちで作られ、『靈枢』経脈篇の成立を見る。②属絡(臟腑との関連)・五行の中に五臓が取り込まれる過程を必要とする。経脈に臟腑が折り込まれて行く過程を保存しているのが『靈枢』營氣篇である。馬王堆出土『十問』に示されているように五味が胃から吸収されて房中のジャンルから生まれ、五臓に取り込まれて行く。五味が周身ルートを運行する過程を示しているのは『靈枢』五味篇である。③その中を流れるもの(気)の存在・身体の諸要素を氣に一元化する過程がある。例えば『靈枢』營衛生会篇など。④微針の登場とそれに伴う治療技術の変化・動詞としての(刺す)と(針す)は異なる。(刺す)には針をうつこと以外に(血脈)からの瀉血を意

味する場合も含まれている。さらに針治療を施し血と氣との両者を治療する過程(『靈枢』九針十二原)を経て、身体各所を(気)のめぐる(経絡)によって治療する形態に至るのである。

以上のように、『黄帝内経』中には血管と見做し得るものを(脈)として考慮していた時期の内容をもつ篇が含まれている。『黄帝内経』の成立過程を再考することで、(経脈血管説)もまた、徒らな否定も肯定もされるべきではないことが知られるのである。

(大正大学・大東文化大学)